

<研究ノート>

地代論論争文献

かん
姜 昌 周

解題——この文献目録は、下記3氏それぞれの地代論論争文献一覧表を照し合せて、時系列的に編み直したものである。各文献の頭番号(一連番号)は、論戦の変遷を順次映し撮っていると書いてもよい。括弧内の数字は、三氏三様の資料番号である。照合のさい参考にされたい。それに括弧内のページは、その「一覧表」が載っている3氏それぞれの、つぎの著書ページを意味する。つまり、

(1)山田勝次郎著 『地代論』 岩波書店 1957年5月、

(2)向坂逸郎著 『地代論研究』 改造社 1948年2月、

(3)遊部久蔵著 『「資本論」研究史』 ミネルヴァ書房 1958年12月。

いわゆる平均原理か・限界原理か、あるいは両者は矛盾するものか否か。この課題は、地代論論争の争点の一つとして提起された古いものではあるが、しかし未解決のままであって、いまなお新しい難題であるといえよう。この課題にアプローチするためには、地代論論争に立ち返って、一先ず先学の業績をフォローするのも無意味ではあるまい。そこで、手っ取り早く前掲3著に載っている「一覧表」を対比してみると、確かに大筋では共通点が多い。が、三者のいずれかが、見落としている資料も少なくない。たとえば、目録(4)高田保馬の論文など、誰の目にも明らかに論争文献であるものが抜けているのである。この目録を自ら編み直すゆえんである。漏脱文献を簡単に番号だけでまとめると、つぎの17篇である。

- | | |
|-----------------------|---------------------|
| 4 (山田5, 向坂4, 遊部——) | 8 (山田7, 向坂7, 遊部——) |
| 7 (山田6, 向坂7で言及, 遊部——) | 9 (山田8, 向坂10, 遊部——) |
| | 11 (山田——, 向坂9, 遊部5) |

- | | |
|-----------------------|-----------------------|
| 26 (山田——, 向坂23, 遊部——) | 47 (山田40, 向坂——, 遊部37) |
| 27 (山田20, 向坂——, 遊部20) | 48 (山田——, 向坂——, 遊部38) |
| 32 (山田——, 向坂32, 遊部——) | 49 (山田——, 向坂——, 遊部39) |
| 33 (山田——, 向坂30, 遊部——) | 50 (山田——, 向坂——, 遊部40) |
| 43 (山田——, 向坂——, 遊部33) | 51 (山田——, 向坂——, 遊部41) |
| 46 (山田——, 向坂43, 遊部——) | 52 (山田——, 向坂——, 遊部42) |

さて、地代論論争は、価値論論争(1922年起点)の延長・発展の形態をとって惹起された。すなわち1928年に土方成美が、マルクス価値論の「破綻」を、マルクス地代論の諸々の「論理矛盾」をもって——あるいは「矛盾」を創り上げて——立証しようと力んだことから始まる。この論争は、表(73ページ)で見ると10年間に21名が参加して、熾烈に議論が戦わされた。それは、この目録で見る52篇の論争文献に凝結されているのである。

批判側の論点は二つであった。すなわち差額地代は、剰余価値が転化したものか否か。これが一つ。いま一つは、繰り返しになるが、差額地代論の限界原理と価値論の平均原理とが、論理的に矛盾するか否か、である。論争前半期では、二大争点をめぐって賛否両陣営間で激論が交わされた。が、1931年9月河上肇が再登場して(目録2と21参照)、賛否両論に批判を加えた。これを機に擁護者間の内部論争(後半期のそれ)が、主として第一論点をめぐって展開されたのである。諸論稿に対する山田勝次郎(生産説)と向坂逸郎(流通説)の「寸評」も本目録に収めたが、両者を合わせ読むならば、長期にわたる乱戦や苦戦の経緯をも垣間見ることができるであろう。

列挙の諸論稿のうち、手の届かなかった数篇(43.46.47.52続編)を除いては、現物を綿密にかつまた成心なく確めたつもりである。資料の入手など些かの骨折りもあったが、その解決には本学の研究助成と附属図書館の助力とに負うところが多い。記して謝意を表わしたい。それに実を言うと、この目録は、いま準備している別稿の付属資料にする予定であった。けれども、紙数が予想を上回り、もはや一篇の論稿の附篇としては内容的になじまないくらいもあって、切り離すことになったのである。何らかの機会にお役に立つことがあるならば、望外の幸せである。

地代論論争文献

地代論論争の論稿数

単位：篇

参加者 年度	批判陣				反 批 判 陣 (陣内論争者含む)													計 (21名)				
	土方 成美	二木 保幾	高田 保馬	小泉 信三	河上 肇	猪俣 津南雄	三木 清	榑田 民蔵	向坂 逸郎	林 要	河本 勝男	野呂 栄太郎	加地 雄介	酒井 市太郎	橋田 三郎	古沢 有造	入江 猪太郎		仙田 喜三郎	山田 勝次郎	相川 春喜	平田 良衛
1928	1				1																	2
1929		1																				1
1930			3			1	1	1	1													7
1931			5	1	2			7	3	2	1	1	1	1								24
1932								3	4	2					1	1	1					12
1933																		1				1
1934																			2			2
1935																			1	1		2
1936																						
1937																					1	1
計	1	1	8	1	3	1	1	11	8	4	1	1	1	1	1	1	1	1	3	1	1	52

(注) 何回かに分けて発表された長篇の論文がある。なかには、次年度にまたがるものもあるが、それは初年度の発表分と見なした。

1928年

1 (山田 1, 向坂 1, 遊部前書きで言及)

土方成美「地代論より見たるマルクス価値論の崩壊」(『経済学論集』第6巻第4号 東京帝大 4月)。

山田評——この論文のほかに「緒戦」の論稿として、山田は4篇(姜No. 2.3.5.6)を列挙している。

向坂評——「最近まで続いた所謂『地代論々争』の先駆である」(277ページ)。

2 (山田 2, 向坂 2, 遊部前書きで言及)

河上肇「マルクスの絶対地代論——土方教授の『地代論より見たるマルクス価値論の崩壊』と題する論文の分析——」(『社会問題研究』第86冊 7月, 『河上肇全集』第17巻 岩波書店 1982年6月 所収)。

山田評——土方と河上との「対立は、展開せずに終り、また後の論争にも影響を及ぼさなかった」(221ページ)。「緒戦」論文(1参照)。

向坂評——「マルクスの対差地代論及び絶対地代論に関する簡単な紹介を含む」(277ページ)。

遊部評——土方に対する河上の反批判が、「この〔地代論——姜〕論争の序幕であった」(229ページ)。

1929年

3 (山田 3, 向坂 3, 遊部 1)

二木保幾「マルクス価値論に於ける平均観察と限界原理との矛盾」(『中央公論』12月)。

山田評——「この論文は、論争の本格化の契機となったもので、しかも、論争の全過程を通じて批判者側の見解を代表しうる内容をもつ、注目すべきものである」(221ページ)。「緒戦」論文(1参照)。

向坂評——「最近数年にわたりて戦わされたマルクス対差地代論に関する論争のきっかけとなりたる論文である」(277ページ)。

1930年

4 (山田 5, 向坂 4, 遊部——)

高田保馬「マルクス価値論の価値論」(『経済論叢』京都帝大 第30巻第1号 1月)。

山田評——山田は、「急展開の熱戦」論文として8篇(姜No.4.7.8.9.10.12.13.17)を挙げている。

向坂評——「マルクスの価値論を『内在的』(高田氏)に批判されたるもの。その中で、マルクスの対差地代論が価値論と相矛盾せることを述

ぶ」(277~278ページ)。

5 (山田4, 向坂5, 遊部2)

猪俣津南雄「誰がマルクスを矛盾させたか——一つの反批判, 並びに地代論への一寄与として——」(『中央公論』 2月)。

山田評——二木保幾に対する「この反論は, 論旨並びに例証の全体にわたって完全に的外れのもので, 失敗であった」(221ページ)。「緒戦」論文(1参照)。

向坂評——「二木保幾氏の論文『マルクスの価値論に於ける平均観察と限界原理との矛盾』を批判し, 自らのマルクス対差地代論解釈を示せるものである」(278ページ)。

6 (山田4で言及, 向坂6, 遊部3)

三木 清「資本論の冒瀆——本誌前々号所載二木保幾教授の論説を読みみて——」(『中央公論』 2月)。

山田評——この論文は, 「方法論の観点から二木氏の観念論的な考え方を批判したもので, 地代論争には直接の関連をもたなかった」(221ページ)。「緒戦」論文(1参照)。

向坂評——「二木保幾氏の『マルクスの価値論における平均観察と限界原理との矛盾』を批判せるものである」(278ページ)。

7 (山田6, 向坂7で言及, 遊部——)

高田保馬「労働価値説は支持し得らるるや」(『改造』 8月)。

山田評——「表現上のニュアンスを度外視すれば, 地代論の観点からみて, 高田氏の所説は二木氏の見解の再版に過ぎない」(221ページ)。「急展開の熱戦」論文(4参照)。

向坂評——「高田氏のこの論文は, 氏の所謂『超越的批判』である」というもの(278ページ)。

8 (山田7, 向坂7, 遊部——)

榎田民蔵「マルクス労働価値説の擁護」(『中央公論』 10月, 『榎田民蔵全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——「高田氏の二論文〔4および7——姜〕を対象とした反駁論であるが、マルクスの唯物弁証法の方法を正しく把握していなかったために、論敵と同じような無理解を自己暴露したにすぎなかった。したがって、論敵の逆襲をよび起こしたのは当然である」（221～222ページ）。「急展開の熱戦」論文（4参照）。

向坂評——「主として高田保馬氏の『労働価値説は支持し得らるるや』なる論文を批判せるものである。その際、対差地代の問題にも触れて論ずる」（278ページ）。

9（山田8，向坂10，遊部——）

高田保馬「労働価値説の擁護難」（『中央公論』12月）。向坂「一覧表」では、高田論文の発表が1931年2月となっているが、誤りである。

山田評——「榊田氏の擁護論の無力性を衝いた逆襲論である。榊田氏の見解も、結局、差額地代となる剰余価値の成立を正しく説明できず、差額地代抹殺論とならざるを得ないと、「高田は——姜」断定する」（222ページ）。「急展開の熱戦」論文（4参照）。

向坂評——「榊田民蔵氏の『マルクス労働価値説の擁護』に対するものである」（279ページ）。

10（山田9，向坂8，遊部4）

向坂逸郎「マルクスの地代理論」（『改造』12月，同著『地代論研究』改造社1948年2月所収）。

山田評——「一般市場価値法則の偏倚を主張した点は正しいのであるが、それを差額地代の源泉問題として徹底的に考察することができないために、マルクスの価値法則を蹂躪し否定する曲論に陥り、いわばリカードの市場価格論の水準に落ち込んだものである」（222ページ）。「急展開の熱戦」論文（4参照）。

向坂評——「高田保馬氏の『マルクス価値論の価値論』中のマルクス対差地代論批判に対して答ふるを機会として向坂自身の解釈を示せるものである」（278～279ページ）。

1931年

11 (山田——, 向坂9, 遊部5)

榊田民蔵「差額地代と価値法則」(『批判』1月, 『榊田民蔵全集』第3巻
改造社 1935年3月 所収)。

向坂評——「高田保馬氏の従来のマルクス労働価値説批判中, 対差地代
論に関する部分のみを取り出して批判せるものである」(279ページ)。

12 (山田10, 向坂11, 遊部6)

榊田民蔵「マルクス批判者のマルクス地代論——マルクス差額地代論は高田
教授によって如何に歪曲せられたか——」(『中央公論』2月, 『榊田民蔵
全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——「従前からの生産価格論段階の説明の蒸し返しと, 『生産物
の剰余があるから, それだけの剰余価値がある』というような謬見の外
に, 『価値総量すなわち社会全体の観点からみれば, 差額地代に転化する
剰余価値は虚偽でなく, また価値法則も破壊されずに妥当する』という趣
意を論証するための, 珍妙な価格運動論(すなわち, 商品交換を通じての
差額地代のプラス・マイナス論)をつくり出し, いわば, 向坂説からの救
援軍を求めるといふ帰結となっている」(222ページ)。「急展開の熱戦」論
文(4参照)。

向坂評——「高田保馬氏の『労働価値説の擁護難』に対するものであ
る」(279ページ)。

13 (山田11, 向坂12, 遊部7)

高田保馬「マルクスの地代論と価値論」(『改造』4月)。

山田評——「社会全体の観点に立つ, 地代となる剰余価値のプラス・マ
イナス論は, マルクスの平均利潤説の破壊だという, 抗議的追撃である」
(222ページ)。「急展開の熱戦」論文(4参照)。

向坂評——「榊田民蔵氏の論文『マルクス批判者のマルクス地代論』に
対する駁論及び向坂逸郎の『マルクスの地代理論』に対する駁論を含む。

河上肇氏の『経済学大綱』に於ける対差地代論にも論及批判する」(279ページ)。

14 (山田15, 向坂14, 遊部9)

櫛田民蔵「差額地代と平均利潤——高田教授の答弁——」(『批判』 5月, 『櫛田民蔵全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——山田は、「惰性の水掛論」という項目のもとに、姜No. 14.15.16.18.19.20.22.27.34の9篇を別に分類している。そして彼は「以上の諸論文は、例外なく、従前からの自説を繰り返すだけであって、水掛論の類にすぎないものである」と断じる(223ページ)。

向坂評——「高田保馬氏の『マルクスの地代論と価値論』への反批判である」(280ページ)。

15 (山田13, 向坂15, 遊部10)

向坂逸郎「地代理論の展開のために」(『改造』 5月, 同著『地代論研究』改造社 1948年2月 所収)。山田「一覧表」では、向坂論文が1931年4月発表となっているが、誤りである。

山田評——水掛論(14参照)。

向坂評——「高田保馬氏の『マルクスの地代論と価値論』なる論文に対して答へたるものである」(280ページ)。

16 (山田14, 向坂13, 遊部8)

向坂逸郎「没落日本資本主義 猪俣イズムの検討 資本蓄積論と地代論」(『中央公論』 5月)。なお、山田・向坂・遊部3氏の「一覧表」では、題名が「猪俣津南雄氏の資本蓄積論と地代論」となっているが、原文によって訂正した。

山田評——水掛論(14参照)。

向坂評——「猪俣津南雄氏の二木氏批判に於ける主張を極めて簡単に批評せるものである」(279ページ)。

17 (山田12, 向坂17, 遊部12)

櫛田民蔵「近代地主的土地所有の弁護について——高田教授『マルクスの地

代論と価値論』を読む——」(『改造』 6月、『榊田民蔵全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——「その論旨の要点として、絶対地代が抽象され、差額地代のみが問題となるとき、土地価格を資本構成のCに見積れば、農業資本の相対的高位性を認めることができるというような主張を新たに考え出し、従前からの差額地代分のマイナス・プラス論を弁護するという、むちゃくちゃな曲論が展開されている。こな論文は、(1)農業資本の歴史的低位性の否定、(2)農産物価格は平均利潤率の形成を前提するというマルクスの規定の無視、(3)絶対地代の完全な無視、(4)資本主義的生産様式にたいする土地私有制度の桎梏性の否定、したがって土地私有制の弁護、等の多くの重大誤謬を含んでいるものである」(223ページ)。「急展開の熱戦」論文(4参照)。

向坂評——「高田保馬氏の『マルクスの地代論と価値論』に対する批判である」(280ページ)。

18 (山田16, 向坂16, 遊部11)

高田保馬「マルクス地代論をめぐりて」(『改造』 6月)。

山田評——水掛論(14参照)。

向坂評——「榊田民蔵氏の『マルクス批判者のマルクス地代論』への反批判の補論をなし、高田氏自身のマルクス対差額地代論批判の要点を再説し、更に向坂逸郎の『地代論の展開のために』を反駁せるものである」(280ページ)。

19 (山田17, 向坂18, 遊部13)

高田保馬「マルクスを破壊する者」(『改造』 7月)。

山田評——水掛論(14参照)。

向坂評——「主として榊田民蔵氏の『近代地主的土地所有の弁護について——高田教授「マルクスの地代論と価値論」を読む——』に対する反駁である」(280ページ)。

20 (山田18, 向坂20, 遊部15)

榊田民蔵「マルクス批判の必然性」(『中央公論』 9月, 『榊田民蔵全集』 第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——水掛論 (14参照)。

向坂評——「高田保馬氏『マルクスを破壊する者』に対する駁論である」(281ページ)。

21 (山田22, 向坂21, 遊部16)

河上肇「地代論に関する諸氏の論争」(『中央公論』 9月, 『河上肇全集』 第19巻 岩波書店 1982年5月 所収)。

山田評——「低調な諸論戦の交錯」として16篇(つまり姜No. 21.23.24.25.28.29.30.31.35.36.37.38.39.41.44.45)を取り挙げている。この諸論稿について山田は、「以上の諸篇は、要するに、自説弁護、他説論難の繰り返しの類に属するものばかりである」と評している(225ページ)。

向坂評——「高田保馬氏の批判を反駁すると共に、猪俣津南雄氏、榊田民蔵氏、向坂逸郎等の地代論を批判する。同時に、河上氏の対差地代論を紹介する」(281ページ)。

22 (山田19, 向坂19, 遊部14)

榊田民蔵「ブルジョア民主主義革命の一図表としての『差額地代表』——高田氏『マルクスを破壊する者』に答ふ——」(『批判』 9月, 『榊田民蔵全集』 第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——水掛論 (14参照)。

向坂評——「高田保馬氏の『マルクスを破壊する者』に対する駁論、河上氏の『地代論に関する諸氏の論争』へも言及す」(281ページ)。

23 (山田24, 向坂22, 遊部17)

向坂逸郎「地代の『戦闘的解消』——河上博士の地代論——」(『中央公論』 10月, 同著『地代論研究』 改造社 1948年2月 所収)。

山田評——低調な論戦の交錯 (21参照)。

向坂評——「河上博士の『地代論に関する諸氏の論争』に対する駁論である(281ページ)。

24 (山田25, 向坂25, 遊部19)

林要「論壇時評」(『中央公論』 10月)。

山田評——低調な論戦の交錯 (21参照)。

向坂評——「河上博士の『地代論に関する諸氏の論争』評を主とし、林氏自身の対差地代論に関する意見を述ぶ。櫛田民蔵氏の『わが国小作料の特質について』にも論及す」(282ページ)。

25 (山田26, 向坂24, 遊部18)

河本勝男「マルクス地代論とその歪曲者——主として差額地代の問題について——」(『プロレタリア科学研究』第2輯 10月)。

山田評——低調な論戦の交錯 (21参照)。

向坂評——「高田保馬氏, 河上肇氏, 櫛田民蔵氏, 猪俣津南雄氏の対差地代論を批評し, 且つ自己の主張を明かにせんとするものである」(282ページ)。

26 (山田——, 向坂23, 遊部——)

野呂栄太郎「櫛田氏地代論の反動性」(『中央公論』 10月)。

向坂評——「櫛田民蔵氏の『わが国小作料の特質について』(『大原社会問題研究所雑誌』第8巻第1号〔1931年6月, 『櫛田民蔵全集』第3巻改造社 1935年3月 所収——姜])の批評。所謂『地代論論争』にも関説」(281ページ)。

27 (山田20, 向坂——, 遊部20)

高田保馬「マルクス地代論の解釈」(『経済論叢』第33巻第4号 京都帝大 10月)。

山田評——水掛論 (14参照)。

28 (山田27, 向坂26, 遊部23)

加地雄介「地代論に於ける論争の諸家は如何なる種類の理論家か？」(『批判』 11月)。

山田評——低調な論戦の交錯 (21参照)。

向坂評——「河上肇氏, 櫛田民蔵氏 及び 向坂逸郎の対差地代論を批判

し、自己の主張を述べたるものである」(282ページ)。

29 (山田23, 向坂27, 遊部21)

河上肇「地代論に関する共同戦線党の暴露」(『改造』第13巻第11号 11月, 『河上肇全集』第19巻 岩波書店 1982年5月 所収)。

山田評——「拙稿の『概論』では、第二論文の意義を少しく過重評価したが、河上説も結局のところ、榊田氏の歪曲論(「差額地代の剰余価値量が控除されて低減する平均利潤率の形成」の主張)と、向坂説(不等価交換説)との混合論に終わっている」(224ページ)。なお、山田は、この河上論文も「低調な諸論戦の交錯」の一篇として位置づけている(21参照)。

向坂評——「榊田民蔵氏及び向坂を以って『共同戦線党』を地代論上に結成せるものと看做し、榊田氏を再び批評し、向坂の『地代の「戦闘的解消』』を論駁しつつ、自己の主張を述ぶ。今度の河上氏は自己の前説を根底から覆す」(282ページ)。

30 (山田28, 向坂28, 遊部22)

榊田民蔵「河上博士に答ふ——併せて野呂氏へ——」(『中央公論』 11月, 『榊田民蔵全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——低調な論戦の交錯(21参照)。

向坂評——「河上肇氏の『地代論に関する諸氏の論争』に対する反駁を主とし、野呂栄太郎氏の『榊田氏地代論の反動性』を反批判す」(282ページ)。

31 (山田29, 向坂31, 遊部25)

林要「修飾せられた地代論——河上博士に答へる——」(『経済往来』12月)。

山田評——低調な論戦の交錯(21参照)。

向坂評——「河上博士の『地代論に関する共同戦線党の暴露』中、林要氏の所論に関する部分に答へると同時に、向坂の対差地代論を批評す」(283ページ)。

32 (山田——, 向坂32, 遊部——)

酒井市太郎「地代論に就いて——河上博士の地代論を見る——」(『大倉学会

誌』第4巻第2号 12月)。

向坂評——「河上肇氏の対差地代論の紹介である」(283ページ)。

33 (山田——, 向坂30, 遊部——)

小泉信三「効用説と費用説」(『改造』 12月)。

向坂評——「所謂地代論論争にも一言論及す」(283ページ)。

小泉は、この論文で高田保馬援護を一段落ほど序でに述べたにすぎない。
論争文献に入れるのは、いささか疑問が残る(以上——姜)。

34 (山田21, 向坂29, 遊部24)

高田保馬「地代論争の決算」(『改造』 12月)。

山田評——水掛論(14参照)

向坂評——「河上肇氏の『地代論に関する諸氏の論争』を批評し、櫛田民蔵氏の主張に及び、最後に一言向坂の地代論に言及す」(283ページ)。

1932年

35 (山田30, 向坂33, 遊部26)

向坂逸郎「九官鳥は歌ふ——加地雄介氏は『如何なる種類の理論家か』——」
(『批判』 1月, 同著『地代論研究』改造社 1948年2月 所収)。

山田評——低調な論戦の交錯(21参照)。

向坂評——「加地雄介氏の『地代論に於ける論争の諸家は如何なる種類の理論家?』に対して答へたるものである」(283ページ)。

36 (山田31, 向坂34, 遊部27)

向坂逸郎「河上博士の地代論——その『自己清算』の始り——」(『労農』
1.3月, 同著『地代論研究』改造社 1948年2月 所収)。

山田評——低調な論戦の交錯(21参照)。

向坂評——「河上博士の『地代論に関する共同戦線党の暴露』に答へたるものである」(284ページ)。

37 (山田33, 向坂36, 遊部29)

向坂逸郎「『独占』的地代理論——林要氏の地代論を読む——」(『経済往

来』 2月, 所収)。

山田評——低調な論戦の交錯 (21参照)。

向坂評——「林要氏の『修飾せられた地代論——河上博士に答へる』なる論文中, 向坂の所論に触れたる部分に答へたるものである」(284ページ)。

38 (山田32, 向坂35, 遊部28)

榊田民蔵「河上博士の地代論」(『大原社会問題研究所雑誌』第9巻第1号 2月, 『榊田民蔵全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収)。

山田評——低調な論戦の交錯 (21参照)。

向坂評——「河上肇氏の『地代論に関する共同戦線党の暴露』を主として反駁したるものである」(284ページ)。

39 (山田34, 向坂37, 遊部30)

林要「向坂君の『社会的または自然的』(//) 地代論」(『批判』 3月)。

山田評——低調な論戦の交錯 (21参照)。

向坂評——「向坂の『「独占」的地代理論』に対するものである」(284ページ)。

40 (山田38, 向坂38, 遊部31)

橋田三郎「地代論争を鳥瞰す」(一)(二)(三)(四)(五) (『批判』 3.4.5.7.8月)。

山田評——「向坂説の垂流としての観点からの通覧」(225ページ)。なお, 山田は論争の「終局」論文として, 40.42.47の3篇を挙げている。

向坂評——「猪俣津南雄氏, 榊田民蔵氏, 林要氏, 河本勝男氏, 河上肇氏, 向坂逸郎等のマルクスの側からするもの, 高田保馬氏, 土方成美氏, 二木保幾氏等の反マルクスの側からするものの一切の所謂『地代論争』を『鳥瞰』し, 批判すると同時に, 自己の見解を示せるものである」(284ページ)。

41 (山田35, 向坂39, 遊部32)

向坂逸郎「林要先生の弁明をきく——地代理論について——」(『批判』 5月, 同著『地代論研究』 改造社 1948年2月 所収)。

山田評——低調な論戦の交錯（21参照）。

向坂評——「林要氏の『向坂君の「社会的又は自然的」(//) 地代論』に対するものである」（285ページ）。

42（山田39，向坂40，遊部34）

榎田民蔵「『地代論争鳥瞰』を評す」（『批判』 7月，『榎田民蔵全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収）。

山田評——「終局」論文（40参照）。

向坂評——「橋田三郎氏の『地代論争を鳥瞰す』の中，榎田氏に関する部分を反駁せるものである」（285ページ）。

43（山田——，向坂——，遊部33）

古沢有造「マルクス絶対地代論解釈に関する若干の疑問」（『社会』 7月）。

44（山田36，向坂42，遊部36）

林要「『地代論争』一まづ打切りの弁」（『批判』 10月）。

山田評——低調な論戦の交錯（21参照）。

向坂評——「橋田三郎氏及び向坂逸郎に対する地代論争打切りの弁である」（285ページ）。

45（山田37，向坂41，遊部35）

榎田民蔵「河本氏の地代論」（『大原社会問題研究所雑誌』第9巻第2号 10月，『榎田民蔵全集』第3巻 改造社 1935年3月 所収）。

山田評——低調な論戦の交錯（21参照）。

向坂評——「河本勝男氏の『マルクス地代論とその歪曲者——主として差額地代の問題について——』に対する榎田氏の反批判である」（285ページ）。

46（山田——，向坂43，遊部——）

入江猪太郎「マルクス地代論への覚書——リカアドオ外国貿易理論批判への前言——」（『丘人』 神戸大・学生雑誌部 1932年以下不明）。

向坂の「一覧表」では，上掲の論題を「別名」にし，本題を「マルクスに依るマルクス地代論論争の解決」にしている。それに出典も「不明」となっ

ているが、その理由について向坂は、別の箇所でつぎのように言っている。すなわち、「この論文の載った雑誌は私には不明である。私は、ただ、その別刷をいただいたにすぎない」と(54ページ)。

ここに掲げた論題や出典は、筆者(姜)が入江氏からじかに確認(1987. 10.13)したものである。入江論文は、大学2年生時代の労作のようである。が、戦中の疎開かまたは不意の火災かによって、自蔵の『丘人』誌すら喪失しているので、刊行月まで知る術はない。

1933年

47 (山田40, 向坂——, 遊部37)

仙田喜三郎「資本論を巡る論争」(『社会』1月)。

山田評——「櫛田説の垂流的観点からの全論争者に関する短評集」(225ページ)。「終局」論文(40参照)。

1934年

48 (山田——, 向坂——, 遊部38)

山田勝次郎「地代論は如何に研究すべきか?」(『歴史科学』白揚社 5.6. 7.8月, 同著『地代論論争批判』同友社 1948年3月 所収)。

49 (山田——, 向坂——遊部39)

山田勝次郎「差額地代論に関する私見」(『歴史科学』白揚社 1934年9. 12月 1935年1.2.3月, 同著『地代論論争批判』同友社 1948年3月 所収)。

1935年

50 (山田——向坂——, 遊部40)

相川春喜「櫛田民蔵氏の理論傾向」(『経済評論』1.2月)。

51 (山田——, 向坂——, 遊部41)

山田勝次郎「絶対地代論の正しい把握のために——マルクス絶対地代論に關

地代論論争文献

する歪曲および疑問の批判的解明——」(『歴史科学』 白揚社 11.12月, 同著『地代論論争批判』 同友社 1948年3月 所収)。

1937年

52 (山田——向坂——, 遊部42)

平田良衛「地代論争に関する覚書」(『経済評論』 10月)。

なお、稿末に「つづく」という予告がある。が、続篇の有無を確かめることができなかった。諒とされたい。

